

令和五年度花卷市民芸術祭

第十七回文芸大会作品集

一般の部

花卷市民芸術祭実行委員会

第18回花巻市民芸術祭第17回文芸大会入賞者

と き 令和5年11月18日

ところ 花巻市生涯学園都市会館

<短歌>

作品募集の部	天位	関 園子
	地位	多田 聡子
	人位	花巻南高等学校 多田 帆香
当日詠の部	互選最高点歌賞	千田 正平
	千田 正平 選	特選 石黒 和夫
	石黒 和夫 選	特選 多田 聡子

小・中学生の部 奨励賞

—中学校—	西南中学校	2年	伊藤 真桜
	湯口中学校	2年	佐々木彩花
	湯口中学校	2年	高橋 芽姫
	大迫中学校	2年	鎌田 一愛
	花巻北中学校	2年	蔦谷 和子
	花巻北中学校	2年	吉田 千紘

<俳句>

作品募集の部	団体賞	東和句会
	大畑 善昭 選	特選 武田 稲子
	武田 稲子 選	特選 上野 節子
	畠山 濁水 選	特選 小原 裕文
	高橋 和枝 選	特選 清水 嘉信

当日句の部	互選最高点句賞	安部 克詠
	大畑 善昭 選	特選 高橋 和枝
	安部 克詠 選	特選 武田 稲子
	武田 稲子 選	特選 後藤 冴子
	佐々木みき子 選	特選 市川 和子

小・中学生の部 奨励賞

—中学校—	花巻中学校	3年	川村 碧泉
	花巻中学校	3年	笹木 雄心
	湯口中学校	3年	小山田智咲
	西南中学校	2年	根子 愛梨
	湯本中学校	3年	高橋 快
	大迫中学校	3年	伊藤 陽翔

<川柳>

総合	1位	及川 洋一郎		
	2位	宮野 裕		
	3位	藤川 忠巳		
宿題	「揺れる」	及川洋一郎 選	特選	高橋えり子
宿題	「声」	塩釜アツシ 選	特選	宮野 裕
席題	「楽」	宮野 裕 選	特選	山口 耕作
宿題	「自由吟」	あべ 和香 選	特選	藤川 忠巳
席題	「雲」	有原すみれ 選	特選	及川 洋一郎
席題	「鍋」	小田島花浪 選	特選	及川 洋一郎

小・中学生の部

宿題	「空」	あべ 和香 選		
—中学校—	特選	湯口中学校	3年	神山 咲綺
	秀逸	西南中学校	2年	伊藤 真桜
	佳作	西南中学校	2年	照井 蒼大
	佳作	西南中学校	2年	佐藤 奏芽
	佳作	西南中学校	2年	伊藤 真桜
	佳作	西南中学校	2年	藤原 彩花
	佳作	西南中学校	2年	藤原 朱里
宿題	「歌」	藤川 忠巳 選		
—中学校—	特選	西南中学校	2年	照井 湊愛
	秀逸	西南中学校	2年	高橋 美桜
	佳作	西南中学校	2年	根子 愛梨
	佳作	西南中学校	2年	菊池 元慈
	佳作	西南中学校	2年	照井 蒼大
	佳作	西南中学校	2年	原 唯夏
	佳作	西南中学校	2年	伊藤 真桜
	佳作	湯口中学校	3年	松下 倅大

<詩>

作品募集の部	芸術祭賞	「私は」	朝倉 了子
	優秀賞	「時の雫」	英 阿音子
	奨励賞	「夏のこども」	大森 敦子
	佳作	「あなたとわたし」	ルディア・ひろこ
	佳作	「窯は眠れない」	安部 勝衛
	佳作	「上り列車」	永田 豊

小・中学生の部

—中学校—	奨励賞	「おはようのプレゼント」			
		大迫中学校	1年	藤田 凜花	
	奨励賞	「見えないだけで」			
		西南中学校	2年	澤田 佳音	
	奨励賞	「自然の不思議な力」			
		大迫中学校	1年	遠山 莉央	
	奨励賞	「かえる」	石鳥谷中学校	1年	高橋 莉愛

<随筆>

作品募集の部	芸術祭賞	「一人じゃない」	花巻南高等学校	多田 結香
	優秀賞	「親父の車と私」	花巻南高等学校	高橋なゆた
	奨励賞	「裏山の湧水に想う」		藤井 茂
	佳作	「私の貴重な経験」	花巻南高等学校	小笠原想菜
	佳作	「神楽との暮らし」	花巻南高等学校	阿部 楓
	佳作	「愛にあふれた地域を」	花巻南高等学校	小林ななみ

目次

一、隨筆	一、詩	一、川柳	一、俳句	一、短歌
P 21 }	P 16 }	P 10 }	P 3 }	P 1 }

令和五年度花巻市民芸術祭第十七回文芸大会

「短歌」 作品募集の部 入選作品

天位

明日から放射線治療始まります友のメールに身の引きしまる

関 園子

地位

チョコレートの腕に誇り持ち農業女子は未来を語る

多田 聡子

人位

友人の一風変わるアイデアが場を和ませて視界を晴らす

花巻南高 多田 帆香

当日詠の部 入選作品

互選最高点歌賞

城跡の坂道しぐれ鳥たちはほどよき木蔭に入りてゆくなり

千田 正平

特選

コロナにて四年休みし当日詠今日久びさに仲間と詠めり

千田 正平 選

石黒 和夫

間一髪霜降る前に菊摘めり幸せ色を小鉢によそふ

石黒 和夫 選

多田 聰子

令和五年度花巻市民芸術祭第十七回文芸大会
「俳句」 作品募集の部 入選作品

大畑 善昭 選

特選

牛膝さみしい人に付いていく

(東和) 武田 稲子

秀逸

水口に泥鱸ゆらゆら水落とす

(如月会) 上野 節子

閑けさの中の賑わい虫月夜

(あしたば) 高橋 静

鬼蜻蜓だうだう巡る童話村

(新樹の会) 関 園子

入選

行く秋の水底を日の渡りけり

(如月会) 上野 節子

早池峰に湧く雲幾重稲を刈る

(如月会) 上野 節子

虫すだくライトアップの童話村

(如月会) 市川 和子

秋溽暑脳味噌はまだ使へます

(あしたば) 佐々木みき子

工房のお茶のひとつときむぎこがし

(東和) 小原 裕文

牧閉じの牛の鼻紋に虻の影

(東和) 畠山 濁水

蝗食ふて農夫とげとげしくなりぬ

(東和) 畠山 濁水

別名が赤茄子なんて知りもせず

(東和) 菊池 久代

青春の一回きりの登山靴

(花城文芸) 清水 嘉信

夏帯を米と換へたる戦の日

(新樹の会) 千葉 任子

武田稲子 選

入選

北上川の風を集めて青胡桃

(新樹の会) 後藤 冴子

消えることなき鬼灯の灯を吊す

(あしたば) 佐々木みき子

草の戸の客を迎へし天の川

(東和) 小原 裕文

夕かなかな一声のみのそれつきり

(新樹の会) 中村 陽子

棚田十枚蝗とばして郵便夫

(東和) 畠山 濁水

秋風や画鋏ばかりの掲示板

(如月会) 高橋 和枝

達者にも賞味期限あり秋惜しむ

(新樹の会) 久保田テイ子

青春の一回きりの登山靴

(花城文芸) 清水 嘉信

手も足も放り出したる酷暑の夜

(東和) 熊谷 敏子

爽やかや工房の木偶眼欲る

(新樹の会) 千葉 任子

特選

水口に泥鰯ゆらゆら水落とす

(如月会) 上野 節子

秀逸

地に還る落葉大地の色もてり

(あしたば) 高橋 静

北上川へ返すがごとく水落す

(花城文芸) 安部 克詠

早池峰の木霊の宿る通草の実

(東和) 多田ゆう湖

畠山濁水選

入選

主どの今日はジャズかと木守柿

(あしたば) 蛭沢 秀一

焦げ目美し八頭身の初秋刀魚

(如月会) 市川 和子

地に還る落葉大地の色もてり

(あしたば) 高橋 静

いわし雲分けて入りぬ露天風呂

(新樹の会) 中村 陽子

牛膝さみしい人に付いていく

(東和) 武田 稲子

どんぐりがひとり遊びの子を誘ふ

(如月会) 高橋 和枝

秋風や画鋏ばかりの掲示板

(如月会) 高橋 和枝

北上川へ返すがごとく水落す

(花城文芸) 安部 克詠

口まねてやがて哀しき虫の宴

(東和) 多田ゆう湖

夏帯を米と換へたる戦の日

(新樹の会) 千葉 任子

特選

秋の蟬一首残して庭を去る

(東和) 小原 裕文

秀逸

潮風や崖の灯となる蝦夷黄菅

(新樹の会) 後藤 冴子

落日に染まり遊船折り返す

(あしたば) 栗城 静子

早池峰の木霊の宿る通草の実

(東和) 多田ゆう湖

高橋和枝 選

入選

北上川の風を集めて青胡桃

(新樹の会) 後藤 冴子

焦げ目美し八頭身の初秋刀魚

(如月会) 市川 和子

棟上げの五色の旗や鰯雲

(あしたば) 蛭沢 秀一

月に呼ばれ玻璃戸大きく開きけり

(あしたば) 高橋 静

一湾を褥にしたる鰯雲

(東和) 武田 稲子

棚田十枚蝗とばして郵便夫

(東和) 畠山 濁水

「ごめん」から「ありがとう」になる敬老日

(新樹の会) 久保田テイ子

秀逸

行く秋の水底を日の渡りけり

(如月会) 上野 節子

素麺流しまだ青竹の香を放つ

(あしたば) 栗城 静子

畑仕事ジリリと強き西日かな

(花城文芸) 葛巻 学

手も足も放り出したる酷暑の夜

(東和) 熊谷 敏子

梅雨明けの葬儀に菊の白さかな

(花城文芸) 葛巻 学

別名が赤茄子なんて知りもせず

(東和) 菊池 久代

当日句の部 入選作品

特選 大畑善昭 選

しろがねの月を上げたり葱畑

高橋 和枝

秀逸

梟の林いつから人家の灯
土俵撤去されし校庭枯葉飛ぶ
薄ら日を拾ひ拾ひて冬の蝶

佐々木みき子
市川 和子
高橋 和枝

入選

産卵は一日一個鶏小春
天辺は鳥の領域柿を挽ぐ
今年米赤穂の塩があればいい
伍切りのいらぬ伍詰新走り
弟の手を引く姉の七つ祝ぐ
張り替へてある無住寺の白障子
溪谷の奈落まで秋おしよせる
本堂に持ちかへり用の銀杏の実
涸れきつて残る古井戸木の葉舞ふ
寄り合ひはいつも酒出て寒北斗

畠山 濁水
安部 克詠
武田 稲子
菅原砂登子
栗城 静子
高橋 和枝
関 園子
佐々木みき子
栗城 静子
畠山 濁水

特選 安部克榮 選

今年米赤穂の塩があればいい

武田 稲子

秀逸

光太郎居大きゴム長冬支度
大根引き不知火型に構へけり
伍切りのいらぬ伍詰新走り

久保田アイ子
蛭沢 秀一
菅原砂登子

入選

鯉の口ぶかぶか小春日和かな
収穫の白菜抱ひて下校せり
抱へゆく翔平案山子子等が追ふ
表具屋の町に一軒鳥渡る
もやもやに火の点く一語霧の中
陶房の軒の日溜り石露の花
木の葉舞ふ言の葉めくや詩碑の辺に
ランドセルふたつ行く畦小春空
恋といふ文字の掠れや寂聴忌
銀杏散る新刊本の赤い帯

大畑 善昭
市川 和子
栗城 静子
上野 節子
大畑 善昭
上野 節子
中村 陽子
市川 和子
関 園子
関 園子

特選

武田 稲子 選

反戦の声のとどかず冬に入る

後藤 冴子

秀逸

しろがねの月を上げたり葱畑
ランドセルふたつ行く畦小春空
活断層殊に色濃き冬もみぢ

高橋 和枝
市川 和子
島山 濁水

入選

天辺は鳥の領域柿を挽ぐ
恋といふ文字の掠れや寂聴忌
馬柵より顔出す仔牛小六月
大根引き不知火型に構へけり
張り替へてある無住寺の白障子
溪谷の奈落まで秋おしよせる
折りたたみ傘のようなる秋日暮れ
凜として咲ききる力冬薔薇
冬立つや早池峰空を塗り換へる
戦争をしてる国より白馬來

安部 克詠
関 園子
上野 節子
蛭沢 秀一
高橋 和枝
関 園子
久保田テイ子
安部 克詠
後藤 冴子

特選

佐々木 みき子 選

ランドセルふたつ行く畦小春空

市川 和子

秀逸

初焼やいま暫くの入日かな
馬柵より顔出す仔牛小六月
天辺は鳥の領域柿を挽ぐ

蛭沢 秀一
上野 節子
安部 克詠

入選

反戦の声のとどかず冬に入る
抱へゆく翔平案山子子等が追ふ
張り替へてある無住寺の白障子
絹派木綿派どちらもいいと新豆腐
明けの鐘十万石は霧の中
凜として咲ききる力冬薔薇
薄ら日を拾ひ拾ひて冬の蝶
戦争をしてる国より白馬來
弟の手を引く姉の七つ祝ぐ
恋といふ文字の掠れや寂聴忌

後藤 冴子
栗城 静子
高橋 和枝
後藤 冴子
栗城 静子
関 園子

互選最高点句賞

天辺は鳥の領域柿を挽ぐ

安部 克詠

令和五年度花巻市民芸術祭第十七回文芸大会

「川柳」 作品募集の部 入選作品

宿題「声」 塩釜 アツシ 選

特選

ひらがなの声掛け合って散歩道 宮野 裕

秀逸

トーンダウン聞きたい耳が寄ってくる 宮野 清子

声高い方へ流れる川がある 河津詠太郎

戴いた声を囁く頭陀袋 小田島花浪

佳作

なつかしい声が聞こえる墓参り 永井 成子

民の声選挙の日までは天の声 伊藤 昇

どの薬よりもすぐ効く孫の声 藤川 忠巳

歌声は平和求めて響き合う 及川洋一郎

野心家に聞かせたいなあ澄んだ声 中村 眞子

国葬で声なき声に蓋をされ 小田島花浪

手習いは70才の声聞いて 戸来 明子

本気度を声で仕分ける父の技わざ 山口 耕作

会議室潜めた声が邪魔をする 宮野 清子

海洋放出魚の声も届かない 有原すみれ

宿題「揺れる」 及川 洋一郎 選

特選

名曲に心が揺れて旅支度

高橋えり子

秀逸

新婚の愛も揺れます物価高

英 阿音子

決断が揺れて勝運遠ざかり

宮野 裕

震源はロシア地球儀揺れている

河津詠太郎

佳作

夢うつつ微熱が続く窓の月

小田島花浪

介護され揺れる心にある温み

山口 耕作

美しく老いるときめき鼓動する

山口 耕作

化学の目揺らしつづける温暖化

中村 眞子

核ボタン不響和音に揺れている

あべ 和香

無人駅コスモス揺れて人を待つ

佐々木勝子

決断を迫る私のやじろべえ

有原すみれ

コロナ禍で揺れる慶弔お付き合い

丹野ウメ子

秋風に揺れる黄金の稲穂かな

清水 嘉信

宝くじ当たる夢見るハンモック

中村 眞子

宿題「楽」

宮野 裕 選

佳作

邦楽はいにしえ語る平和の音

中村 眞子

特選

新緑を楽しむ老母ははの車椅子

山口 耕作

薪割も水汲みも無く台所

丹野ウメ子

欲捨ててしまえば楽な道があり

河津詠太郎

坊さんの話し楽しく死ぬ話

及川洋一郎

秀逸

苦も楽も皺しわに刻んで七十年

藤川 忠巳

楽々と手にした銭の軽さ知る

藤川 忠巳

楽しみも健康こそが道標

山田 逸子

楽勝とよぎる瞬間狂い出す

高橋みか子

帰省して楽しく語る同級生

永井 成子

楽しみは二人で今日は何食べる

永井 成子

話には聴いたが長寿楽じゃない

及川洋一郎

楽をして稼げるはずの闇バイト

有原すみれ

毎日が日曜という楽隠居

英 阿音子

宿題「自由吟」

あべ 和香 選

特選

人類の輪と知恵試す大自然

藤川 忠巳

秀逸

平和こそ理想郷への第一歩

藤川 忠巳

今日もまた生きた証しの靴が減り

宮野 裕

信じ合い賢治を学び土守る

佐々木勝子

佳作

一本の糸で繋がる夢もある

有原すみれ

仮想敵睨んで崖に立つ平和

伊藤 昇

温暖から沸騰止めるのはヒト

照井 地蔵

長く生き出合い様ざま今宝

丹野ウメ子

ブラボーとみんなが言えるユートピア

英 阿音子

話したきことあり夜のシャープペン

及川洋一郎

老いの得見^{とく}えないものが見えてくる

河津詠太郎

穂が出れば出たで百姓身が細る

小田島花浪

丁寧^{ていねい}に生きてる友に学ぶ日々

高橋えり子

ひとしづく夢は空から大海へ

有原すみれ

席題の部 入選作品

席題 「雲」

有原 すみれ 選

特選

地球儀の涙を見たか羊雲

及川洋一郎

秀逸

さびしくないかぼつかりと秋の雲

宮野 清子

雲に問う平和の行方ゆくえ冬の章

あべ 和香

朝は父夕は母なる雲の顔

蛭沢 秀一

佳作

白鳥の雲路知りたや声聞こゆ

高橋みか子

雲行きが怪しく光る老母ははの舞

山口 耕作

温暖化入道雲が戒める

及川洋一郎

雲のパンお腹の空いた帰り道

宮野 清子

硝煙を見て来た雲の涙雨

あべ 和香

名月にこれも又いい流れ雲

小田島花浪

雲流れアルバム捲る日が続き

宮野 裕

一瞬の朝焼け雲の彩に酔う

島 美香

雲ゆきを読むのは爺いの瞳に頼る

小田島花浪

雲掴むような話で誘う特殊詐欺

宮野 裕

佳作

鍋奉行いと助かる手抜き主婦

高橋みか子

席題 「鍋」

小田島 花浪 選

大玉の白菜今夜は鍋と決め

宮野 清子

特選

湯豆腐を温めなおす仲直り

及川洋一郎

ちゃんこ鍋愚痴も煮込んでグツグツ

有原すみれ

秀逸

寒くとも幸福一杯鍋の底

山口 耕作

6人が2人になって鍋が泣く

有原すみれ

これ以上我慢ができぬ鍋の蓋

塩釜アツシ

鍋の穴くぎでふさいだ嫁の意地

畠 美香

湯豆腐が滾り話題が煮零れる

宮野 裕

鍋の蓋政治の闇は深くなる

宮野 裕

新婚の鍋にはいらぬ調味料

あべ 和香

鍋釜の賑わい見せる家族の和

及川洋一郎

令和五年度花巻市民芸術祭第十七回文芸大会

「詩」 入選作品

照井 良平 選
牛崎 敏哉 選

芸術祭賞

私は

朝倉 了子

時には悲しみは突然くる

予感も 前触れもなく

そんな時もある

過ぎて何日か

― あれが予感 ―

― あれが前触れ ―

残された自分に都合の良いような

悲しみを創っている

葬祭センターを後にして

後ろ髪引かれる思いをふりきり

私は家路に向かう

日常と「非日常」は

軽トラックのハンドルが引き継ぐ

七十六才の自分に

いつの間にか

非日常が合体して

「日常」の一日に変わって馴染んでいく

あれほどの悲しみも

安らぎの居場所に変わる

そして私は

今日を生きる

優秀賞

時の雫

英 阿音子

絶え間なく

確実に

時の雫が滴る

どんな音がするのか

耳を澄ましても聞こえはしない

容赦なく

ひとときも止まりはしない

手品師が

一瞬 時の雫を

シルクハットの中に溜めて

溢れるまで放っておいたら
その雫はどおなるのだろう

きつと 時空を越えて

旅に出る雫

過去に遡るか

未来へ進むのか

未来へ進んだ雫は

荒廃した風景を見るのかも知れない
まるで別の惑星のような地球に：

雫は暗い気持で戻って来る

シルクハットの雫は

引力に逆らわず

時の流れに身をまかせる

時の雫は悟った

摂理に従うことを

私も悟らなければならぬ

残り時間の雫の一滴一滴

決して無駄にしてはならないと

奨励賞

夏のこども

大森 敦子

夏のこどもは光っている

土色に焼けた肌

今かぶりつく桃のようなうぶ毛

または風にそよぎ収穫を待つ小麦か

金色の柔らかな光

夏のこどもはきらめいている

海にプールに噴水に

歓声あげて飛び込んでいく

水しぶきを散らせながら

したたる汗を散らせながら

笑顔を刹那に振り撒きながら

夏のこどもは照らされる

手の中のホタル

打ち上げ花火

キャンプのランタン、祭りの屋台

流れ星に願いをかけ

線香花火を見つめる目

こんな暑い暑い夏の日に

燦々かんかんの太陽の中
負けじと輝く子どもたち

その光の残像を

私たちの思い出に残して
次の季節へ走っていく

佳作

あなたとわたし

ルディア・ひろこ

さつきからかんがえてるんだけど・・・
なにを？

わたしはだれなのかな？って
どうして？

だっつてずっとここにいるのに
なんにもできないんだもの

なにをしたいの？
それもわからないからこまってるのよ

わたしはだれだとおもう？
あなたはあなたよ きつと

どうして？
だっつてわたしはわたしで

あなたじゃないもの

へえー じゃあわたしがふたりいるわけね
そうよ あなたのわたしとわたしのわたし
でももうすぐわたしはべつのとこにいくの
どこへ？なぜ？

かぜさんがむかえにきて

すてきなところにつれてつてくれるの
かぜさんてだあれ？

とつてもやさしくてきもちがいいのよ
わたしもつれてつてくれないかなあ

かぜさんにつこりわらつてみせれば？
そしたらつれてつてくれる？

きつとだいじようぶよ

そんなはなしをしていたら

そよかぜがやさしくふいてきて
ふたりのわたしをふわつととびあがらせ

いいきもちにしてくれながら
ずつとはなれた

すてきなばしよでおろしたかぜさんは
ふたりともげんきでねって

どっかいっっちゃった

ふたりのわたしはようやくわかったんだ
あそこではなく ここではなになるって

あたたかいおひさまとやわらかいつち
いろんなあなたといっしょに

ここでさくんだって！

窯は眠れない

安部 勝衛

粗末な屋根がところどころ破けて

月が覗き見する

星たちも月をまねて

集団で覗いたりする

雲がそれを咎めて

中空に立ち塞がる

なんと

それをいいことに

雨粒どもがいきなり

屋根の破れを狙い

いつせいに落てくる

窯は眠れないのだ

夜半

窯は我慢出来なくなり

千度に達する怒りの火炎を

天へ向かつて放ち

黒煙たちが

屋根の破れを覆い隠すが

雨粒どもはお構いなしに
熱く熱した窯の背中に
跳ねてはたちまち消えてゆく

三日三晩の後

窯はやつと眠りに入り

少しずつ

少しずつ

あの怒りの炎を沈めてゆく

季節が移ったある日

時おり

カーンとけたたましく

屋根を叩く奴がいる

眠り続けていた窯が

突如響く甲高い音に目覚め

外を覗くと

またカーンと

どんぐりどもが

思い思いに屋根を叩いて

戯れ合っているのだ

安物の波トタンが

これ見よがしに音を立てるので

森の中の窯は

やっぱり眠れないのだ

上り列車

永田 豊

東北のまだ目覚めぬ大地を切り裂いて
上り列車はひたすら東京を目指す

私は薄目を開けて後方に流れる

他人のような風景を見るときもなく見る

スピードが視覚を孤立させる

上りと下りの由縁など今更と目尻で思っている

風景が立ち上がって叫ぶ

ほんとうにそうなのか

眠ったように見える田畑が叫ぶ

僅かに残る疎林が叫ぶ

かつて上り列車は東北の人々を奪って行った

今より硬い座席に身を任せ

この風景の中を数知れぬ駅のホームの人々に見送られ

見知らぬ異国の戦場へ

あるいは満蒙開拓の先兵として

下り列車には敗れた夢と白木の箱がひっそりと座っていた

戦後も

金の卵などと言われ

十五歳の少年少女が懐かしい故郷から引き剥がされ

上りの集団就職列車に揺られて行った

一九六四年の東京オリンピックや高度経済成長を

支えたのも

上り列車に乗った東北の農民

下りの夜汽車には疲れきった農民が春の農作業の
喜びを懐に眠っていた

今 時速二百キロこのスピードは人をたぶらかす

およそ四時間で

上り列車は東京に着く

思考停止のまま

憧れだけが肥大する だが

三・一東日本大震災が鮮明に隠し絵を炙り出す

東京の不夜城を煌かせる電気は東北を素通り

嫌われ者の放射能は東北の人や大地にばら撒かれ

故郷を追われた人々

だが 責任を取った者はいない

今日も上り列車が東北の風景を切り裂いて疾駆する

だが

目を閉じて座り続ける人々を乗せ

各駅停車の鈍行上り列車は今も東北の大地を行くが

まだ終着駅に到着していない

令和五年度花巻市民芸術祭第十七回文芸大会

「随筆」 入選作品

野中 康行 選
山口トヨ子 選

芸術祭賞

一人じゃない

花巻南高等学校 多田 結香

私は中学校に入学後、吹奏楽部に入部した。姉が中学校で吹奏楽部に入っていてその影響もあり憧れていた。私の担当楽器は姉と同じのユーフォニアムになった。しかし、その年に吹奏楽部に入部したのは私一人だけだった。そんな私に先輩方はとても優しく接して下さり、楽譜の読み方など沢山のことを教えてくれた。そのおかげで私は充実した部活動をする事ができていた。

二年生の十二月。三年生が引退し、私が部長となった。二年生が一人のため、自分がしつかり部をまとめなくてはいけないというプレッシャーが大きかった。三年生になったら、新しい一年生も入部する。人数が増えることもあり、本当に自分が部を引っ張っているのか心配で仕方なかった。そんな中、二月のコンテストを終えた頃、私は体調を崩してしまい、約一か月間、部活に行くことができなくなってしまった。その間も一年生だけでしつかりやれているのかとても心配だった。

三月下旬。ようやく学校に行けるようになり、部活にも戻れるよ

うになった。久しぶりの部活で一年生がどうなっているのか緊張と不安の気持ちで私は音楽室の扉をあけた。すると一年生は「先輩！」と言い、久しぶりに私が戻ってきたことを喜んで声をかけてくれた。たった一か月しかたっていないのにみんなの顔は前よりも堂々としていた。その後、先生に話を聞くと、一か月間、一年生で役割を決め、みんなで部活を頑張っていたというのだ。その時、私は今まで抱えていた、これから部を一人でまとめていけるかという不安がなくなった。大変な時は、みんなに頼っていけばいいのだと気づくことができた。

三年生になり、一年生が六人入部した。大変なことも一、二年生と一緒に考えて、努力して乗りこえることができた。私の三年間の思い出は一生大切なものになった。

優秀賞

親父の車と私

花巻南高等学校 高橋 なゆた

高校二年の秋に、父親と学校帰りの車の中で話したことだ。私はたまに父の車で送り迎えをしてもらう。道中すれ違った車を見て「スープラだ。カッコいいな。」などと話したりしている。父は運転中、よく仕事に対しての文句を言う。

休日、父と一緒に洗車をしていた。私はスポンジをこすりながら「ぼろぼろだな。」とつぶやいた。「味があると言え。」と父はホー

スの水で泡を流しながら笑った。なんだかんだで私も、父の車を気に入っているのだ。洗車を終えても、相変わらず錆や傷が目立っていた。

ある日、学校から帰ると、駐車場に父の車とは違う軽自動車が停まっていた。父に車検なのかと聞くと、「車の調子が悪いから修理に出した。」と哀しそうな顔で言っていた。

代車で学校に向っている時、父はつまらなさそうにハンドルを握っていた。私も少し乗りづらいなと思ひ、助手席に座っていた。しばらくして、父の車は直って帰ってきた。

その後は調子がよくなった父の車で送り迎えをしてもらった。いつも通り、ハンドルを握る父は、仕事の文句を言っていた。

ある秋の日、帰路につく車の中、家まであと数十メートルという所で父が口を開いた。「お前、高校卒業して免許取ったら、この車整備して乗れよ。」父は慣れた手つきで駐車場に車を停める。「は、いらないよこんな古いぼろぼろの車。」と私が言うと、父は少し寂しそうな顔をして「そうかよ。」とだけ言い、車を降りた。

私も父のあとを追ひ、ふと振り返ると、秋の日差しを浴び、赤とんぼが止まった、錆だらけのシボレーサバーバンのライトが、恨みがましい目でこちらを見ていた気がした。

奨励賞

裏山の湧水に想う

藤井 茂

あと少しすると、近くの川も雪解け水で嵩が増す。大雪の今冬は、山にも里にも大そう降り積もり難儀した。雪もやがては水となり、地面に浸み込み田畑を潤す糧となる。

家の裏山の長い尾根裾に、「古屋敷」と呼んでいる湧水がある。昔からこんこんと湧いている、サンショウウオが棲む清い水だ。正月には幣束を立て感謝の祈りを奉げ、秋には落ち葉を浚い澄んだ水場を保つ。

四十年前、お盆には毎年三十人程の親戚知人が集い、泊まり客も入れ代わり立ち代わりで旅籠の様だった。そんな生活が一月も続いたろうか。一番困ったことは、水枯れだった。都会の人というのは立て板に水を流すように水道を使う。勝手の洗い物の手伝い等申し出られると有難い反面、後のことを考えて緊張した。台風一過の如く親戚が帰った後、家族で労う暇もなく水対策と相なる。

軽トラックに大樽を二つ積み、一斗バケツと柄杓を載せて「古屋敷」に向かう。風呂の水に使用するためだ。

水道に蛇口があり、捻ると水が出る。至極当然の様に感じるが、これがどっこい、使い過ぎるとタツつとも出なくなる。限りある自然、「自家水道だったのだ。」嫁に來た当時の沢山の驚きと不思議の中の一つが、公共水道が通ってなかったことだ。

それから二十数年後、我が里にもやつと町水道が通り、併せて浄化槽も据えた。やつと軽トラックでの私の水汲みは無罪放免となった。人間の欲とは限りないので、水不足の心配がなくなると、有難い公共水道の味が気になりだした。「美味しい水で珈琲を飲みたい！」の妻の一言で、今度は、名水を求めて旦那が軽トラックを走

らせる。

春は未だ浅く、残り少ない農婦の冬休みを惜しみながら、「早春賦」を静かに奏でる。名水を鉄瓶で沸かし珈琲を淹れる。目をやれば陽当たりの傾斜地に福寿草が咲いている。

佳作

私の貴重な経験

花巻南高等学校 小笠原 想菜

「ゆっくりで大丈夫。」

私は緊張しやすい。応え方を間違えてしまったらどうしよう。いつもマイナスな思考になってしまい、感覚に敏感になって緊張してしまう。受験生の今でこそ、学校で行われる期末試験や模擬試験などのテストが多くなり、緊張する出来事は増える。

去年、修学旅行で東京に行った。コロナウイルスの影響で中学生の頃に行く予定だった東京へ行く事が出来なかつた為、東京に行くのは私にとってこれが初めてだった。東京ほど遠い地方へ行く機会は滅多になく、とても楽しみで期待に胸が膨らんだ。

修学旅行は四泊五日。五日間の中で先生方が立ててくれた計画に、東京グローバルゲートウェイという項目があるのを見つけた。東京グローバルゲートウェイが何をやる場所なのかと聞くと英語を話す体験をする為の施設である、とのことだった。修学旅行でも英語を勉強しなければならぬのか、とクラスの皆と同じように私も少

し肩を落としつつ、貴重な体験だから良いか、と思う事にした。

修学旅行四日目、東京グローバルゲートウェイへ行く日。グループ七人程度で施設内を周って英語で会話するというもの。各グループに一人先生が付く事になっているが、ネイティブで日本語の通じない先生だ。どうしよう、私の話す英語は通じないかもしれない。緊張と不安が募る。しかし実際は、話した事を理解していて、分からなくなった時は先生がアドバイスをくれた。自然と緊張がほぐれて英語で会話する事の楽しいという感覚を覚えた。

ふと私に、何と言っているのかわからない、と不安そうな顔をして話す友達。すぐに私は友達が、緊張して思考が停止しているのだと分かった。安心させようと出来る限り落ち着いた口調で私は友達に言った。

「ゆっくりで大丈夫。」

神楽との暮らし

花巻南高等学校 阿部 楓

私が前谷地神楽を習い始めて、今年で八年目になる。小学校五年生から始めた神楽は、今となっては私の日常生活にすっかり溶け込んでいる。

神楽を始めたきっかけは、父の影響が大きいだろう。父は、小学校五・六年生を対象とした神楽クラブの先生であり、自身も幼少期から神楽を続けている。小学校低学年の時に父の舞っている姿を見

てから、私は神楽の虜になっていた。そんな父の姿に憧れ、私も迷うことなくクラブへ参加した。仲の良い友人と四人で舞う時間は楽しく、私にとって神楽は遊び場でありかけがえのない場だった。

中学校に入り、私は舞子から囃子担当に移った。「高齢となった篠笛の先生から教わり、地域に伝わる神楽をこれからも守っていくんだ。」という意志のもと、日々練習に取り組んだ。先生はとても優しく教えて下さり、お祭りなどのイベントで一緒に演奏したのは良い思い出だ。

コロナが流行してからは、今まで出演していたイベントが中止になり、神楽の活動を行えずにいた。コロナ禍で高齢の先生は活動が難しく、思っているよりも継承活動を行えず、もどかしい日が続いた。

高校二、三年生頃からはだんだん元通りの生活が近づいてきた。イベントも少しずつ開催され、私の大好きな神楽活動が再開された。小学生のメンバーも入れ替わり、新体制で行う神楽はとても楽しかった。

この前谷地神楽は、小学校の統合により来年度からの活動の見通しが立っていない。私は総合探求でも神楽の保全活動について取り組み、地域へのアピールを始めた。芸能祭りに出演したり新聞で取り上げもらうなどの取り組みを通し、地域からの関心を集めていきたい。これからも地域で継承されていけるよう、私は大学に進学し、学んだことを神楽に還元したい。

愛にあふれた地域を

花巻南高等学校 小林 ななみ

今年の夏、お盆が過ぎた頃、三年ぶりに北上地域でのふれあい運動体育大会が開催された。

一昨年、新型コロナウイルス感染症の影響で地域の大会が中止になり、これを始めとして地域の活動は全くと言っていい程なくなっていました。そのため、地域の活気も徐々になくなってしまいました。

「人数が足りないから参加して。」

この母の言葉によって、私は初めてソフトバレーボール大会に参加が決まった。地域活動にあまり行っていない私には、知っている人も話せる人もいなかった。さらには、ソフトバレーは全くの未経験で試合でサポートをしようにも足を引張って迷惑がかかってしまうのではないかと、練習に参加するまでも億劫だった。

そんな気持ちの中、初めての練習が始まった。小学生の頃、一緒にバレーをした知り合いがいて、私は少しほっとした。昔話をしたり、他愛のない会話を繰り返した。周りにはフレンドリーなおじさんや近所の人、友達のお父さんなど集まっていて、気まづくならないうように話題を振ってくれたりもした。ソフトバレーのルールを教わった後、やわらかい雰囲気での練習が始まった。練習はとても楽しくて終わった後は億劫な気持ちなんて気付かない内になくなっていった。

大会当日、私達は一回戦目を勝ち抜いて準決勝まで進むことがで

きた。準決勝は惜しくも負けてしまったけれど、試合終了後は絆が深まったと感じた。打ち上げを通して、地域皆と仲を深めることもできた。

今思えば、この大会に参加することができて最高に良かったと思えたし、私自身成長もすることができた。

これらがきっかけで私は地域復興について学んで地元に貢献していききたいと思った。あたたかく愛にあふれた地域を守っていききたい。